## ほたるの群れ5

第五話「希(こいねがう)」

## 向山貴彦



ほたるの群れ

5

第五話 「希 (こいねがう)」

の夏休みは始まった。

## 永児たちは平和な日々を送っていた。 五倉山の暑い夏休み

本る。しかし、学校に送り込まれた二人の駒、阿 生、高塚永児と小松喜多見は命を狙われることに 生、高塚永児と小松喜多見は命を狙われることに 生、高塚永児と小松喜多見は命を狙われることに

重傷を負い、千原は生死不明のまま、 な死闘を繰り広げ、 所属する「院」と、千原の所属する「塾」が壮絶 そして一学期の最後、 多見は度重なる駒の襲撃を紙一重でかわしてきた。 坂浩助と千原行人に結果的に助けられ、永児と喜 白髪の少年と邂逅を遂げる。 永児はその最中、 五倉山頂上の廃墟で阿坂の 戦いの果てに阿坂は 中学三年生 自分を知る

高塚永児

性をなくし、凄まじい能力を発揮する。の「スイッチ」を切ることで、一時的に理の「スイッチ」を切ることで、一時的に理れを目印に「会」に狙われている。頭の中ることのない発光塗料を右手に受けて、そ寝癖頭のお人好しな少年。数ヶ月間は落ち

小松喜多見

なって周りを守ることを自らに誓う。となって周りを守ることを自らに誓う。その後、ASという神経毒を食らっ還する。その後、ASという神経毒を食らっぽった。その後、ASという神経毒を食らったが、水児の助けを借りて生堅物の美少女。「会」の暗殺現場を見たと

千原行人

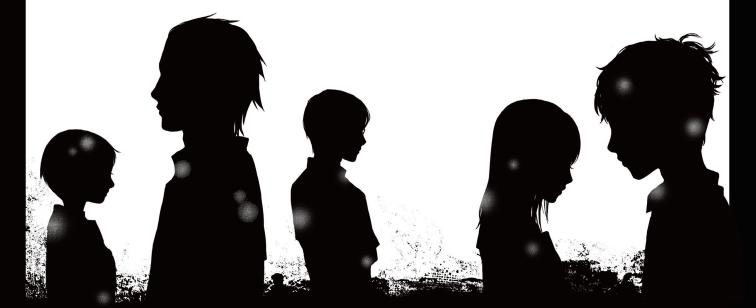
名は「会長」。四巻の最後で生死不明となる。たちの学校に送り込んでいた殺し屋。なんたちの学校に送り込んでいた殺し屋。なんたちの学校に送り込んでいた殺し屋。なんの一派である「塾」が二年前から永児

阿坂浩助

持ち前の体力で順調に回復中。に送り込んだ殺し屋。ゴリラ顔でバヤリーに送り込んだ殺し屋。ゴリラ顔でバヤリーに送り込んだ殺し屋。ゴリラ顔でバヤリーの場が、の一派である「院」が千原を葬るため

米原アズミ

多見と仲良くなってしまい、苦悩中。 に徹し切れない。暗殺するはずの永児や喜 優しい性格が災いして、なかなか駒の仕事 素早く、気配を消すのは一流だが、生来の 素早くが気配を消すのは一流だが、生来の 素早ない



火花舞い散る空の下 光と影は交わりて 人に届かぬ静かな音で 夏の終わりを哀しく報す ていく。

0

血の臭いがした。

の臭い。その中に腹の底から吐き気を催す、タンパク質の臭いが混ざっていた。 小銭を手に握り込んだあとにする金属

あの時は分からなかったが、今ならすぐに分かる。

足の重みで、ギシッとフローリングの廊下が鳴る。 小さな磨りガラスの窓に、ぼ夕方を過ぎたばかりなのに、 家の二階

「姉さん?」 四角い明かりが灯っている。

の廊下は真っ暗だった。

突き当たりのトイレのドア。

ぼんやりと

「姉さん? そう呼びかけた。 トイレに入ってる?」 返事はない。 自分の声が空っぽの家の中に気持ち悪く響い ただけだっ

るはずなのに、その隙間を何かが塞いでいた。 トイレを出るわけがない。下を見ると、 もう一回尋ねたが、 反応は返ってこない。 普段ならドアの下の隙間から細い明かりが漏れてい 胸がトクトクと打ち始めて、いやな予感が広がっ 電 気の消し忘れにうるさい 姉が 点っ け つ 放 しで

んてみんな忘れているはずだった。 夕ご飯の仕度をしながらキッチンで姉さんと三人で話している。その時には、 思い過ごしだ。そう自分に言い聞かせた。きっと今から一時間後には母さんが帰ってきて、 こんなことな

ドアが重たく感じられる。 トイレのドアノブをつかんで回す。鍵はかかっていなかった。 何かに内側から引っ張られているようだった。 ただ、 つもよりもなぜか

ドアを開けた途端、 金属の臭いが一気に強くなる。 ドアの縁から黒いものが床の上に流れ

出してきた。 の先は、床に広がった液体と同じように黒ずんでいる。 溜まっていた。同じものが壁にもこびり付いて、そのまま何本もの線になって流れ落ちている。 赤だった。 がトイレの蓋に座った状態で、 黒ずんだ赤色の、 一瞬、トイレの床が真っ黒になっているのかと思ったが、そうじゃなかった。 真っ 粘り気のある液体が、トイレのマットを完全に沈めるほど床に 横の壁にもたれかかっていた。 だらりと垂れ下がった手

声は出なかった。 床にできた赤黒い水溜まりの中に、無数に落ちているガラスの破片にば

かり目が行った。 それができたのはもう一瞬経ってからだった。 -電話しなきゃ。 そう思った。救急車を呼ばなきゃ。 そのわずかな時間はただ、 床の

見つめていた。 そんなことは不可能だと知りながらも、 姉の血が床の上を染めている。 頭の中ではどうやったらその血を姉の体の中 姉の大事な命が床の上に流れ出していた。

回っていた。 せるかを考えていた。 戻さないと、 姉さんが死んでしまう。 その考えが頭の

落ちているものに意識を奪われた。 なくなって、 の部分だけが微い 赤い血溜まり 叫び出してしまう。でも、 かに見えていた。 の端に何 か が落ちてい きっと、あと数秒で悲鳴がこみ上げてくる。 、 る。 辛うじて理性を保っていたその一瞬だけは、 ガラスの破片じゃな 6.1 それ は血 で覆 訳が分から わ n て、

紙のように薄いもの。 角が曲がってい る。 何 か の模様が見えた。

そう思って、 高塚永児は血 に濡れ たその物体に手を伸ばした。

がくんと椅子の背もたれから落ちかけて、慌てて目を覚ました。

を聞いてやっと、そこがマルサカの一階にある休憩所だということを思い たかと思ったが でー つの間にか自分が眠っていたことに気が付いて、 よく 口は閉じたままだった。目をこすると、『一 知っているスーパーのテーマソングが頭上で賑やかに響いて 頭を軽く振る。思わず声を出 ―おいでマルサカー、 出した。 してしまっ る。 マルサカ それ

朧気に覚えていた。でも、その内容はもう思い出せなくなっていた。 メッドタデ れてきて、階段下の窮屈な休憩スペースに漂っていた。何か怖い夢を見ていたことだけは スナックコーナーからアメリカンドッグを揚げる匂 水色のプラスチック製の椅子に体を起こして、 明るい店内の風景に目が慣れるのを待 いと、 むせ返るようなソースの香りが流 う。

温い 行き交う人の様子をぼんやり眺めながら、 -同じ班の平本 本裕美からだった。 片手で携帯を開く。 眠っ てい ・る間 にメ ル

**週末、これそう? 返事待ってるよー』** 

短い 文面のあとに、 鮮やかな海の写真が添付され てい る。 澄 W だ青 が にも 下

がる、涼しそうな写真だった。

のネットを手に、椅子から立ち上がる。 何も打たないまま携帯を閉じて、ポケットにしまった。そして隣に置いてあっ 今週に入ってから何度目かの、 ためらいながら返信ボタンを押して、 裕美からの誘い しばらく白紙のメ 0 X ル。 ール画面を眺めていたが でも、 まだ返事 たスイ は 出 して カ入り 結局 いな

に買っ に感じながら、 のアナウンスでも、 食品売場を裏口の方に向かって歩き出すと、 たスイカ。 裏口から外に出た途端、 三日前からチラシで目を付けてい 安売りのスイカのことを繰り返し言っていた。 むせ返るような夏の熱気に襲われる。 特売品 たセールの品物だった。 0 Ź ノナウン スが店内に流 食欲のない母親 その n 重み 始 8 ´を左手 のため

## 「暑つ……」

八月半ばの日差しはまだ強く、 は和らぐどころか、りに重たい湿気が体 湿気が体にまとわりつく。 いっそう厳しくなっていた。 肌を刺すようだっ 夏休みに入ってそろそろ一ヶ た。 瞬でエ アコ 月 ンの が過ぎて 冷えが 61 取 れて、 た

横切っ 13 鏡の 路地を歩き出すと、 ようになった窓の中を、 潰れた喫茶店のショー 右手に包帯を巻いて、 ウィ ンド - ウが 左手にスイカを持った自分の姿が 首 の縁をかすめ る。 埃で曇っ

おまえが返してくれんのか」

いる。 前からどんな整髪料を使っているのか会長に聞こうと思いながら、 つも通り、後頭部には寝癖が付いている。直せないかと押さえてみたが、焼け石に水だっ そもそも夏休みに入ってから、一度も会長に会っていなかった。 ずっと忘れたままで

髪を薄い金髪に染めていたが、間違いなく同じクラスの峰剣也だった。 人組が一人の少年を壁に押し付けて、激しく言い争っている。 ふいに寂れた路地に低い怒鳴り声が響いた。反射的に声の方向を見ると、 - 少年の顔に見覚えがあった。 高校生らしい三

ことがない、数少ない一人だった。 わしていなかった。 声が聞こえた。 高校生の一人が峰の胸倉をつかんで、 峰は普段から不良グループに属していて、 夏休み前にノートを破られてからは、 頭突きを食らわせる。 六組の男子の中でもあまり話した ゴスッと音がし ほとんど挨拶も交 て、 0 ż

壁にぶつかる重たい音が路地に響い やり返そうとした峰 近くには誰もいなかった。 が、 横の二人から抑え込まれて、壁に叩き付けられ た。 誰か大人を呼んできた方がいいだろう る。 0 後頭部 と左右を が

スイカが左手で軽く揺れる。 路地を離れ始めたが、 数歩進んだところで立ち止まった。 あの時、 峰は喜多見のノートも破ろうとした。 また峰の呻き声が聞こえる。 それを思

唇を噛んで振り返ると、 たまたま三人組の一人と目が合った。

なんだ、 おまえ?」

赤いTシャツの高校生が、 こっちを見て言っ

「その人、友達なんです」

隙間から峰がこっちを見て、 自分でも奇妙に思いながらぽつりと告げると、 解せない表情を浮かべていた。 その声は路地の壁にこだました。 高校生の

赤シャツが峰から手を放して、近付いてくる。 相手は武器らしいものは持っていなかった。 腕の太さは阿坂の半分もない胸がとくんと打った。怖いの 0 か った

「こいつ、おれらのものをパクったんだよ」

向こうではほかの二人が峰の両腕をつかんで抑えている。 赤シャツは目の前まで来るとそう言って、身長差の分、 少し高 13 位置か 5 り睨み付け

立てた。 のネットを持った手が滑る。 言い終わる前に、赤シャツに肩を強く突き飛ばされた。 転がったスイカは、 スイカはコンクリートの地面に落ちて、グシャッと大きな音を 水分をまき散らしながら靴の爪先に当たって止まる。 体が背後の壁に当たって、 割れた部 スイカ

分から中の赤い果肉が見えていた。 が広がっていく。 壁にぶつかった時に舌を噛んだらしく、 口の中 に鉄の味

「文句でもあるのか、中坊

気がして、 顔を上げて、赤シャツの方を見る。 右手を握り込むと、 包帯の内側でガラス片が冷たく皮膚に触れる。 微かな水音が胸の奥で鳴った。 急に路地 が暗 つ

母さんのスイカ。

れていた。 と上を見ると、 そう思った瞬間、赤シャツの後ろの宙に一本、コードが垂れていることに気が付い 空が真っ暗になっている。 その暗闇から垂れ下がったコードの先で何かが揺 た。 ちらっ

赤シャツに胸元をつかまれる。 無意識に右手を使いそうになって、必死に自分を押し止めた。

何もするなー 赤シャツが拳を振りかざした瞬間、ぐっと目を閉じる。 -相手は駒じゃない。そう自分に言い聞かせた。 でも、 衝撃が来る前に、 後ろから

りの風景はい 「ちょっと! つの間にか、 何してるの!」と、 昼間の明るさを取り戻していた。 まったく別の声が聞こえてきた。 それで目を開けると、 辺

「あなたたち、喧嘩してるの?」

続けてほかのおばさんの声がして、 一緒に足音が近付い てくる。 赤 シャ ッ が 胸元をつ

でいた手を放した。 へと走り出していた。 思わず足がよろめ いて、 壁に手を突く。 その間に、 高校生三人は逆方向

「だいじょうぶ?」

に絡まれてただけっすよ」と軽く返すのが聞こえてくる。 と、声をかけられたが、 どう答えていいか分からなか っった。 峰が路地の向こうから 「不良

血が出てるわよ」

二人に言った。 ちを覗き込んでいる。 そう言われて、 ようやく顔を上げた。 ごまかすように地面に転がったスイカのネットをつかんで、 買い 物用のエコバッグを提げたおばさんが二人、 こっ

「ちょっと口の中が切れただけです」

「本当? 病院に行かなくていい?」

「だいじょうぶです。本当に」

裏口の方へ去っていった。再び路地に人がいなくなって、 唇の端を拭って念を押すと、 二人のおばさんは心配そうに振り返りながらも、 やっと峰の方を見る。 7 ル サカの

「おまえ、バカなんか」

目が合った途端、 いきなり峰が言っ た。 その声に、 少しだけ学校の空気を思 出い

「喧嘩とかしたことないんだろ」 が鼻で笑うようにして続ける。

中で無残な形に割れていて、甘い汁がポタポタと地面に垂れている。 それには何も言わずに、 壁を支えにしてスイカのネットを持ち上げた。 それを見た峰が、声 スイカはネ ・ットの

ンを落として言った。

「割れたんか」

スイカを両手で持ち上げて、 ひびを合わせながらつぶやい

「でもまだ食べられるよ」

通り過ぎていく。 峰はしばらく黙っていた。 その喧騒から隔たった古い裏路地は、然っていた。路地の隙間から見えるアー 静けさと染み込んだ煙草の臭い F 'n 大通りを、 車と大勢の に包

まれていた。 峰はやがて軽く首を振って告げた。

「おまえ、 マジでお人好しだね」

あきれたように肩をすくめてから、 峰が大通りの方を指す。

「おれんとこ、すぐそこだから来いよ。 ラップでもやるよ」

それだけ言って、 峰はさっさと路地を歩き出した。スイカを抱えたままためらっ 7

峰がもう一回「来いって」と促 してくる。 それを受けて自分もあとを追ったが、路地を去る前に、

一度だけ後ろを振り返らずにはいられなかった。 路地は元通り夏の風景に溶け込んで、

ーでも、 乾き始めた血の味を口の隅に感じると、まだ所々にさっき目にした暗闇 灼熱の光が屋根の間 か ら 眩ぎ しく地面に 降 'n がい 名残

を留めているような気がした。 浸って、何週間もそれを見ていなかコードのイメージが脳裏に焼き付い

めていた。 でも、 今までと形が違っていても、 あれが何かはすぐに分かった。

なかった。

そのせいで、

もう見ることはない

とさえ思い始

ていて、

残像が揺れて見える。

夏休みの

穏や

かな日常

に浸って、

ドの先にあったもの。

あれは間違いなくスイッチだった。



表紙には昭和の雰囲気漂う文字で「フロスト詩集」とタイトルが記されている。

あの白髪の

9 3 、見は図書館の地下の閉ざされた空気を頬に感じながら、

夏の暑さをまるで感じさせない静けさを館内にもたらしていた。外の凄まじい蝉の声もここ 辿り、薄暗い書架の間を抜けていった。冷房で冷えた空気と、大理石模様の硬いタイルは、

指で本の背表紙をそっと

も冬でも変わらない。保管されている古い本と共に、時間がずっと止まっているように思えた。 書架の間へ目をやる。 までは届かない。 本を抜き出して手に取る。 指先が探していた本の背表紙に触れると、微かに緊張が走った。唾を飲み込んで、 市立図書館の地下はどこまでも本棚と静寂だけが広がっていた。夏で 分厚い重みがずしりと両手に落ちて、 すえた匂いが鼻を突いた。

-ぼくはその中の白い蜘蛛だよ。

人が言っていた名前だった。

頭の中で響く声に導かれるように、 茶色くくすんだページをめくると、 探してい た詩はす

えく ぼ のある一匹の太った白 41 蜘蛛

白い万病花の上に蛾を掲げ

ごわつ いたサテン布の白い 片 0 様に捧げ

じた。 かわないといけない頃合いだった。 が 7.3 気味の悪い映像を頭の中から追い払おうと、 0 んだ白 最初 の三行が ζ, · 蛾 の 目 羽を毟るイメ に び込ん んでく ジ ると、 が鮮明に脳裏に広がって、 寒気が体を走る。 携帯で時間を確認する。 白い花の上に乗った白い 思わずパタンと本を閉 そろそろ駅に向

が効いていなくて、 本を胸元に抱え、 冷えた肌に天窓から差し込んでくる熱が気持ちよかっ 誰もいない地下の書庫を抜けてから、 階段を上が る。 た。 0 途 中 は 冷 房

をすませて くどこか別の世界から戻ってきたような気分だった。 図書館の入口 のロ 口へ向かおうとしたが、 ビー に出ると、 ようやく夏の音が外から聞こえるようになる。 その前に後ろから名前を呼ばれて立ち止まる。 そのまま貸 し出しカウンターで手続き なん

阿坂浩助がオブジェの彫り込まれた壁にもたれかけるようにして立っていいますがにます。 空耳かと疑った。 た。 振り返ると、

「奇遇だな」

ミニサイズのバヤリースのボトル を口から離し なが 5 阿坂が言う。

阿坂さんー -」そう応えながらも、 ちょっと訝れ しげに阿坂を見つめ返した。 「もしかして、

だ見張ってたんですか。 私のこと」

「そんなんじゃねえよ。 涼しいんだよ、ここ」

阿坂が天井から降りてくる冷気を指差しながら笑みを浮か ベ る。 こっ ちも表情を緩 め て、

柔らかい口調で言った。

だいぶましになったんですね

阿坂がギブスのはずれた足先をくるりと回してみせる。

「やっと普通に歩けるよ」そう言って、 阿坂 が首を傾げた。 「おまえの方はどうなんだ? 体

に異常ないか」

きを返して、ポケットからミニサイズのペットボトルをもう一本取り出す。 ほんの少しためらったものの、 できるだけ自然な表情を作ってうなずい そして「飲むか?」 た。 阿坂もうなず

と言いながら、返事を待たずにこっちへ放り投げてきた。

わずかに距離が短くて、ペットボトルが目の前で床に落ちそうになる。 前のめりに屈んで、それを受け止めた。 とっさに本を脇に

「元気そうじゃねえか」

阿坂が苦笑しながら言う。 社交辞令程度に怒った表情を浮か ベ て、 阿坂に言 返した。

「だめですよ。図書館の中なのに」

そう言って出口の方へ歩き出すと、 、阿坂が 「おい」と言ったが、構わずにそのまま歩き続け

飲むんなら、 外に行かないと」

おまえ、そういう面倒なこと言うから浪人 の妻とか言 ゎ

阿坂がぶつぶつ言うのが聞こえて、 本とペットボトルを胸元に抱い たまま、 振り返っ

坂の方を睨んだ。

「それ言ったら怒りますよ」

ちょっと微笑んで、 むすっとして告げると、 玄関の自動ドアを抜けた。 阿坂が 「こわっ」と小さく つぶやく。 阿坂には見えな いところで

いる。 外はすごい 図書館前のミニ公園からは蝉の大合唱が降り注いできた。 日差しだった。風のない日で、 コンクリ トの歩道にうっすらと蜃気楼が立っ それでも夏の音と光はど

んな時でも強い 日常感を思い出させてくれる気がして、 以前よりもずっと夏が好きになって

「ジュースのお

を見返してくる。 り出した。小銭を差し出すと、 木の下にあるベンチまで歩いて、 阿坂がシャツをパタパタさせながら、 借りた本を置く。 そして、 代わりにバ 煙たそうな顔でその手 ッグ から財布 を取

いいよ。 それぐらい」

「じゃあ、 いらないです」

ばされた大きな掌にお金を落とすと、阿坂がそれをじゃらっと握り締める。 そう言って、バヤリースのボトルを返そうとすると、阿坂が諦めた様子で息をついた。

書館の中が乾燥していたせいで、 の中のバヤリースのキャップをひねった。 喉はカラカラに乾い 甘いものはあまり飲まないようにしていたが ていた。 一回ぐらいはいいことにして、 それでやっと手

「『妻』っていうか、 どっちかっていうと『浪人の母』 だぞ、 おまえ」

ベンチに腰かけると、阿坂がぼそっとつぶやく。

何か言いました?」 ベンチの隣は空いていたが、 阿坂は敢えて木の根元を囲むプランター の端に腰を下ろす。

地味な色のスカ ートがよく似合うな、

「どうせ浪人の母ですから」

皮肉を込めて返しながらバヤリースに口 を付ける。 阿坂が反対方向に顔を背けて

てるじゃねえか」とぼやくのが聞こえた。

「こんなにのんびりしてていいんですか」 が心地よかった。こういうタイミングで飲むと癖になってしまいそうで、 バヤリースはあまり飲んだことがなかったが、 それほど甘くなく、 渇い それが少し悔しい。 た喉に染みる感じ

両手でバヤリースを持って、 阿坂に言った。 阿坂が図書館 の建物の方を向 6.1 たまま、 ぞん

ざいな口調で答える。

「別にのんびりしてねえよ。 ほかの仕事も入ってて大変な ぶんだぞ、 こっち は

だから。逆に不安で 「そうじゃなくて」唇を引き結んで、阿坂に言い直した。「あの夜以来、 ᆜ 何もかもすごく普通

に握り締めた。 阿坂がボトルを口に付けた状態でこっちを見る。 視線が合うと、 膝の上のボトルをひそか

「夏休み直前だったからな」阿坂が答えながら、 も躍起になってたんだろ。 学校が終わっちまうと、 バ ヤリースの残りをぐっと飲み干す。 二学期までおまえらを見付け出す方法が

悪くて、スカートで手を拭った。 ペットボトルの表面を流れた水滴が、 いからな 手の甲に伝わって広がる。 這うような感触が気持ち

「まあ、夏休みの間はのんびりしてろ。どうせそのうち、 また忙しくなる

なのに、その描写にどこか惹かれていた。 よみがえってくる。たった三行の文章が頭にこびりついて離れない。寒気がするような内 が飛んでいるのが目に入った。何気なく蝶を眺めていると、ふいにさっき読んだ詩 阿坂がそう言って、空になったペットボトルにキャップをしている横で、 -怖いのに、 きれいな詩だった。 モンシ の情景が 口 Э ゥ

けうるさかった蝉の声が、 ルを投げ込んでいた。 ガタン、と音が辺りに響く。 戸が、すっかり耳に馴染んでいることを不思議に思いながら、写音はしばらく蝉の声に混じって鳴り響き、次第に消えていく。 その音で我に返ると、 阿坂が金属のごみ箱に空になったボト 阿坂に尋 あ れだ

「阿坂さんも、 アズミも、 五倉山に残るんですよね

31 ほたるの群れ 第五話「希」

ダクラでのことはばれてなかったみたいだな」 「ああ」阿坂はプランターから立ち上がって、尻に付いた埃を両手ではたいた。

「よかった」と小さく答えると、阿坂がちらりとこっちを見た。 横でモンシロチョウが飛び立 0

そこに浮かんだ白い雲が、絵画のような鮮やかなコントラストを作り出していた。 て、頭上を旋回しながら空へ舞い上がっていく。 立ち去りかけていた阿坂がふと足を止める。 そして、 図書館の向こうには夏の青空が広がっていて、 ポケットに両手を入れたままで振り

向いた。

「そう言えば高塚はどうした? 元気か?」

会ってないです」そうつぶやいて、視線を逸らしながら付け足した。「夏休みに入ってから

どこまでも高く

τ̈́,

果てがなさそうだった。

阿坂の後ろに広がる空が高い。

一度も」